

特別支援教育における教師の授業力量に関する研究の動向と課題

立石 力斗 (近畿大学九州短期大学)

Research Trends and Issues on Teachers' Instructional Competence in Special Needs Education
Rikito Tateishi (Kyushu Junior College of Kindai University)

要旨

本研究の目的は、特別支援教育における教師の授業力量に関する研究の動向と課題を明らかにすることであった。本研究においては、授業力量を「知識」「行動あるいは技術」「意思決定」の3つの側面から捉えることとした。特別支援教育における3つの側面に関する研究を概観したところ、各側面について一定の研究知見が蓄積されていることが明らかになった。一方、知的障害教育や肢体不自由教育、特別支援学校に関する研究が中心であった。また、特別支援教育に携わる教師の授業力量に関する研究が十分に蓄積されていないことが明らかになった。今後は、3つの側面に対して、校種・障害種・教育方法などの対象を限定した上で、研究知見の蓄積が求められる。

キーワード：特別支援教育，教師，知識，教授行動，意思決定

Abstract

The purpose of this study was to clarify the research trends and issues regarding teachers' instructional competence in special needs education. In this study, instructional competence was conceptualized from three aspects: "knowledge," "behavior or skills," and "decision-making." An overview of research on these three aspects in special needs education revealed that a certain amount of research findings has been accumulated for each aspect. However, the research was primarily focused on education for students with intellectual disabilities, physical disabilities, and special support schools. It was also found that research on the instructional competence of teachers engaged in special needs education has not been sufficiently accumulated. Future research needs to accumulate findings for the three aspects while limiting the scope to specific school types, disability categories, and educational methods.

Keywords : Special Needs Education, Teacher, Knowledge, Teaching Behavior, Decision Making

1. 問題と目的

1) 特別支援教育に携わる教師に求められる専門性

近年、特別支援学校や特別支援学級に在籍する児童生徒の人数が増加している。平成23年度から令和3年度にかけての児童生徒数の変化から、義務教育段階の全児童生徒数は約1割減少しているものの、特別支援学校の児童生徒数は1.2倍、特別支援学級に在籍および通級による指導を受ける児童生徒数は約2倍増えている(特別支援教育を担う教師

の養成の在り方等に関する検討会議、2022)。

このような、特別支援教育を取り巻く状況も踏まえ、特別支援教育に携わる教師の専門性の重要性が指摘されている。新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議(2021)は、特別支援学校の教師は、「障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を十分把握して、これを各教科等や自立活動の指導等に反映できる幅広い知識・技能の習得や、学校内外の専門家等とも連携しながら専門的な知見を活用して指導に当たる能力が必要である(p.17)」

と述べた。以上から、特別支援教育に携わる教師の専門性を検討することは重要であるといえる。

2) 専門性の一側面としての授業力量

それでは、教師の専門性はどのように捉えることができるか。鹿毛（2017）は、「教師の専門的な能力を表す用語は、資質、資質能力、力量、職能（職業・職務上の能力）、適性、コンピテンシーなど、多岐にわたっており、論者によってその意味内容やその背景にある考え方に異同がある（鹿毛、2017、p.266）」と述べている。また、東・中島（1988）は、教師の力量や資質は、それらを明らかにするアプローチの仕方によって何を示すかが異なっていることを指摘している。一般的に、教師が携わる業務は多岐にわたるといわれている。特別支援学校に勤務する教師は、授業を担当することに加えて、学校事務や保護者や地域との連携、地域におけるセンター的機能を果たす役割、学校外の専門家との協働など、多様な業務に従事する。したがって、特別支援学校教師の専門性を検討する場合、教師の「専門性」を限定して検討する必要があるといえる。

教師は多様な業務に対して多様な専門性を発揮していることが想定される。その中でも、授業は中核的な業務といえる。これまで、授業に関する教師の専門性は、「授業力量」として研究が蓄積されてきた（木原、2004 など）。また、教師の授業力量は固定的なものではなく、教師の成長あるいは発達という観点から「力量形成」として研究が蓄積されてきた（高見、2014 など）。教師の専門性を検討する上で、授業に根差した授業力を検討することは不可欠である。これは、特別支援学校教師にとっても同様である。

3) 本研究の目的

以上を踏まえ、本研究は授業力量に関する概念整理とともに、特別支援教育における教師の授業力量に関する研究の動向と課題を明らかにすることを目的とした。

2. 日本における教師の授業力量に関する研究

1) 用語の定義

本節では、本研究における「授業力量」の用語の定義を行う。

「授業力量」の定義をするに際し、はじめに、教

師の「力量」という用語について確認する。小山（1986）は、教師の力量を「指導技術的な側面と人間の資質的な側面の両面」と定義した。これを受けて、藤原（2007）は、「教師の力量という概念を、資質能力と職能・専門性の中間に位置し、教育活動のための専門的な知識や技術と、そうした活動のよりよい遂行を志向した構えや態度を意味する概念」と定義した。教師の「力量」という場合、藤原（2007）の指摘からもわかるように、教育活動全般が射程に入る。

一方、「授業力量」について、木原（2004）は、「教師が授業を創造する際に必要となる、授業力量（p.20）」と表現している。以上のことから、「授業力量」とは、先述の通り、教師の業務は多岐にわたる中で、授業に関する「力量」を表現していると考えることができる。八木澤（2021）は、「授業力量は、授業設計や実施、評価に関わる場面において発揮される教師の専門的力量（p.21）」と説明している。本論文では、授業に焦点をあてた八木澤（2021）の定義に依拠することとした。

2) 授業力量の構成要素

これまで、授業力量を構成する要素に関する様々な見解が示されてきた。吉崎（1997）は、①授業についての信念（価値観）、②授業についての知識（教授知識）、③授業についての技術（授業技術）の3つの側面から授業力量を捉えた。Darling-Hammond et al（1999）は、授業力量を知識、信念、態度、判断、意思決定、教授技術から説明した。八木澤（2021）は、これらを踏まえて、「行動」「技術」については先行研究（北尾ほか、1988 など）において、行動をパターン化したものを「技術（Skill）」と表現していることが多く、「行動」と「技術」を明確に分けず「行動あるいは技術」と捉えた。また、「信念」「態度」「知識」については、教師の信念に関する研究を概観し、「教師の知識研究では扱いきれない、いうならば暗黙的な知識を研究の対象としている」という指摘、およびこの指摘を踏まえ児玉（2016）が「信念」は「知識」に含まれること、加えて、Darling-Hammond et al（1999）が「信念」「態度」を知識と同じ枠組みで捉えていることから、「信念」「態度」は「知識」に含まれるものと捉えた。さらに、Darling-Hammond et al（1999）が、

特別支援教育における教師の授業力量に関する研究の動向と課題

授業の目標、学習者、教授方法に対して、分析、統合、観察、コミュニケーション、解釈などのスキルを用いて行う行為を「教師の判断と決定」と説明していることを踏まえて、「意思決定」として捉えた。以上のように、八木澤（2021）は授業力量の要素を「知識」「行動あるいは技術」「意思決定」の3つの側面から捉えた。

本研究は、授業力量の定義も踏まえ、八木澤（2021）の定義に倣い、授業力量を「知識」「行動あるいは技術」「意思決定」の3側面から捉えるものとした。

3. 特別支援教育における教師の授業力量に関する研究の動向と課題

1) 分析対象論文の検索方法

国立情報学研究所の論文データベース CiNii を用いて分析対象となる研究論文の選定を行った。

本研究の目的を踏まえ、特別支援教育に関連する用語として「特別支援」「養護学校」「盲学校」「聾学校」を選定した。授業力量に関する用語として、「知識」については「知識」「実践知」「実践的知識」を、「行動あるいは技術」については「教授行動」「教授スキル」「教授技術」を、意思決定については「意思決定」を選定した。特別支援教育に関連する用語と「知識」「行動あるいは技術」「意思決定」のそれぞれの用語を組み合わせた検索を行った。なお、本研究では、学術雑誌や大学紀要に掲載された論文を分析対象とした。

2) 知識に関する研究の動向と課題

笹原・山元（2019）は、知的障害特別支援学校小学部で行われる国語科の授業に着目し、単元検討過程における教師の発話から実践的知識を抽出するとともに、小学部1段階から小学部3段階にかけての授業づくりにおける実践的知識の構造について検討した。その結果、特別支援学校で活用される実践的知識は、教科の目標・内容の系統性や学習状況を踏まえた視点、障害特性や発達の状況を踏まえた視点、生活場面や他の学習とのつながりを踏まえた視点を含んでいることなどを明らかにした。

遠藤・新井（2019）は、特別支援学校のみドルリーダである教師の授業づくりの方法を分析することで、暗黙的に学習に社会的・情緒的側面を取り

入れながら授業を開発・展開している過程を検討した。その結果、みドルリーダの教師は、子どもの自我・それから分化した第二の自我、授業における学習課題の3つを常に意識しながら実践していることなどを明らかにした。

深江・鄭（2021）は、聴覚特別支援学校の個別形態における文章読解授業における教師の実践的知識の活用の特徴と実践力向上の過程を検討した。授業の映像を視聴しながらの教師の発話の分析から、熟練教師と初任教師の実践的知識の違い、および、実践力向上の過程を示した。

坂本・末永（2023）は、小学校の特別支援教室において行われるアサーティブネス指導について、コルトハーヘンの授業リフレクションから教師の実践知を抽出した。

先行研究の研究対象は、知的障害特別支援学校における国語科の授業、みドルリーダ、聴覚特別支援学校における文章読解授業、特別支援教室におけるアサーティブネス指導に焦点が当てられていた。授業づくりや授業過程、授業リフレクションにみられる教師の知識などが明らかにされてきた。

教師の専門性、特に知識に焦点を当てた研究は、教師がもつ知識の領域と構造を明らかにしようとする「実践的知識」とその知識が授業の中でどのように機能しているかをとらえようとする「実践的思考様式」の研究があり、双方の知見から教師の専門性にアプローチすることが求められる（久我、2007）。今後は、特定の対象に対して、「実践的知識」「実践的思考様式」の双方から、教師の知識を明らかにすることが求められる。

3) 行動あるいは技術に関する研究の動向と課題

田中（1983）は、知的障害特別支援学校の教師の特性と教授行動との比較を行った。その結果、教師による行動制御が多いこと、思考を要するような発問が全くみられないこと、教師の占有度が極めて高いことなどを明らかにした。

藤根・大野（1995）は、知的障害特別支援学校の生活単元学習における授業分析から、授業過程や教師の教授行動の特徴を捉えるとともに、授業分析方法の有効性を検討した。子どもの自主的行動や教師の指示・促しの割合が高いなどの特徴を明らかにした。また、指示・促し→自主的行動の系列が中心

特別支援教育における教師の授業力量に関する研究の動向と課題

であることなどを明らかにした。

本母・大久保（2018）は、知的障害特別支援学校において、「授業評価シート」を用いた教師の教授行動の変容を標的とした授業改善に関する検討を行った。その結果、教師のプロンプトと対象児の自発遂行率が変容したことが明らかになった。

大羽・井上（2007）は、小学校の特別支援学級に在籍する発達障害児の担任教師を対象とした個別指導におけるかかわり方の研修を行った。小グループでの講義・演習、eラーニングと各学級の自主研修を組み合わせた研修パッケージの実施を行った。その結果、個別指導場面における各教授行動における教師の適切な指示、援助、機能的な賞賛の割合が向上したことが明らかになった。

先行研究においては、知的障害特別支援学校および小学校の特別支援学級における教師の教授行動を対象とした研究が行われてきた。それらの研究は、教授行動のカテゴリー分析からその特徴を明らかにする研究と、ツールや研修によって教師の教授行動の変容を試みる研究に大別することができる。これらの研究から、特別支援教育における教師の教授行動の特徴や、教師教育への示唆を得ることができる。

一方、先行研究においては、研究対象としているのは、知的障害教育または発達障害教育に携わる教師であり、知見は限定的であるといえる。また、近年の授業過程における教師の教授行動に関する研究が少ないことも課題であるといえる。教師の教授行動は、例えば、授業で用いる教材教具によっても変わることが想定される。GIGA スクール構想に伴う教育環境の変化は、教師の教授行動の変化に影響を及ぼしている可能性があるが知見は十分に蓄積されていない。また、初任者と熟達者の比較など、特別支援教育に携わる教師の教授行動に関する専門性に関する研究の蓄積も望まれる。

4) 意思決定に関する研究の動向と課題

内海ほか（2018）は、肢体不自由特別支援学校で行われる自立活動におけるティーム・ティーチングでの教師の意思決定過程を分析するとともに、分析結果を授業改善に生かすことを目的とした。ティーム・ティーチングによる指導に意思決定モデルを導入することで、授業改善がなされたことを示した。

小倉ほか（2019）は、教師個々の意思決定の違いを生かした授業研究の仮説的なモデルを構築し、有効性を検討した。その結果、教師の実践的知識の向上や協働性の構築といった面でモデルの有効性を指摘した。

北川ほか（2020）は、肢体不自由特別支援学校において行われる自立活動において、動作法の習熟度が若手教師の意思決定に与える影響を検討した。6名の若手教師を対象として実際の授業に即したインタビュー調査を行い、動作法の習熟度によって教師の意思決定に差が生じることを明らかにした。

高橋・小倉（2022）は、特別支援学校での勤務経験を通して得られた特別支援教育に関する実践的知識が通常学級の授業の捉え方に与える影響を検討するため、特別支援学校での教職経験がある教師と教職経験がない教師に対して他の教師が行った授業を視聴してもらい、意思決定の違いを検討した。その結果、特別支援学校や特別支援学級における指導経験が、教師の意思決定に影響を与えていることを明らかにした。

北川ほか（2023）は、肢体不自由特別支援学校の自立活動を主とする教育課程を担当する教師を対象として、自立活動における身体の動きに係る個別指導に関して、授業の計画段階と実施段階における教師の意思決定の構造とともに、教職経験年数等の教師の属性との関連をアンケート調査から検討した。その結果、経験年数が授業の計画段階・実施段階における意思決定に影響を与えること、理論・技法の習熟度は、授業の計画段階に比べて授業の実施段階に影響を及ぼすことを明らかにした。

高橋・小倉（2024）は、知的障害特別支援学校で行われる自立活動の時間における指導に焦点をあてて、若手教師と熟練教師を想定した大学教員（メンター役）の意思決定の違いを生かした協働的な授業研究を行った。その結果、若手教師がメンター役となった大学教員の思考過程や思考内容、授業観察の視点などを学び、指導改善につながったことを示した。

これらの研究から、特別支援教育に携わる教師の授業における意思決定の構造や、意思決定に影響を与える要因が明らかにされてきたといえる。また、教師の意思決定の研究方法を用いた授業改善への

特別支援教育における教師の授業力量に関する研究の動向と課題

試みもなされている。自立活動やティーム・ティーチングによる指導のように、特別支援教育に特徴的な観点からの検討がなされている。

一方、先行研究では、調査対象について課題が残されていると考えられる。5つの研究のうち、3つは肢体不自由特別支援学校教師を対象にした研究である。また、4つが自立活動の指導に関する研究である。特別支援教育の場や教科・領域は多様である。また、個の教育的ニーズに即して様々な指導法や教材教具が用いられる。特別支援教育に携わる教師の意思決定の特徴を明らかにするために、先行研究とは異なる条件における教師の意思決定の特徴を解明することが今後の課題であるといえる。

4. まとめと今後の課題

本研究は、特別支援教育に携わる教師の授業力量に関する研究の動向と課題を明らかにすることを目的とした。本研究においては、授業力量を「知識」「行動および技術」「意思決定」の3観点から検討した。

各観点について、特別支援教育に関する知見が一定蓄積されていることを確認することができた。しかしながら、学術研究の数が少なく、研究知見の限定性が課題であると指摘することができる。各分野によって研究論文の数に偏りはあるものの、知的障害教育や肢体不自由教育に携わる教師を対象とした研究は一定数みられた。一方、その他の障害がある児童生徒への指導や特別支援学級や通級指導に携わる教師の授業力量については十分に検討されているとは言い難い。専門とする学校種や対象児童の発達等により教育の方法が異なるため、各学校種や教師の立場によってどのような知識が求められるのか、また、具体的にどのようなスキルや技が必要とされるかという教師個人がもつ知識や技能が問われている(秋田、2021)。一口に特別支援教育といっても、対象や教育方法などは多岐にわたるため、これらの条件を限定したうえで、知見を蓄積することが求められる。

特別支援教育に携わる教師に求められる授業力量は多岐にわたる。個々の教育的ニーズに合わせることを求められる中でどのような専門性が必要なのか、様々な障害がある児童生徒に対する教師の専

門性の共通点と相違点は何か、ICTをはじめ授業で用いる教材教具の違いによって教師に求められる専門性は異なるのか、小中学校等の教師との専門性の比較など、検討すべき課題は山積している。また、それらの知見を教員養成や現職研修へと波及させることも重要である。今後、特別支援教育に携わる教師の授業力量に関する研究の蓄積が求められる。

付記

本研究は JSPS 科研費 25K06483 の助成を受けたものです。

文献

- 秋田喜代美 (2021) 「教師」について研究するために. 秋田喜代美・藤江康彦編 (2021) これからの教師研究～20 の事例にみる教師研究方法論～. 東京図書.
- 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議 (2021) 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告. https://www.mext.go.jp/content/20210208-mxt_tokubetu02-000012615_2.pdf. (最終閲覧日 2025.9.10)
- 東洋・中島章夫 (1988) 授業技術講座 基礎技術編 1 授業をつくる 授業設計. ぎょうせい.
- Darling-Hammond, L., Wise, A. E. and Klein, S. P. (1999) A LICENSE TO TEACH. Jossey Bass.
- 遠藤貴則・新井英靖 (2019) 知的障害特別支援学校の授業づくりに関する質的研究—ミドルリーダーの実践知の質的分析を通して—. 茨城大学教育学部紀要 (教育科学), 68, 225-241.
- 藤原顕 (2007) 教師の自律的な力量形成の現実. グループ・ディダクティカ編. 学びのための教師論. 勁草書房.
- 藤根収・大野由三 (1995) 精神薄弱養護学校における生活単元学習の授業分析. 特殊教育学研究, 32(5), 15-20.
- 深江健司・鄭仁豪 (2021) 聾学校教師の実践的知識の活用と向上に関する研究—文章読解授業における実践の検討—. 聴覚言語障害, 50(2), 67-79.
- 本母世眺・大久保賢一 (2018) 知的障害特別支援学校における「授業評価シート」を用いた授業改善

特別支援教育における教師の授業力量に関する研究の動向と課題

- の試みー教師の援助行動と児童生徒の自発行動の変容に対する検討ー. 特殊教育学研究, 55(5), 259-270.
- 鹿毛雅治 (2017) 教師の専門的能力. 日本教師教育学会編. 教師教育研究ハンドブック. 学文社.
- 木原俊行 (2004) 授業研究と教師の成長. 日本文教出版.
- 北川貴章・内海友加利・安藤隆男 (2020) 自立活動の個別指導場面における若手教師の意思決定プロセスの分析ー動作法の習熟度に着目してー. 障害科学研究, 44, 149-159
- 北川貴章・内海友加利・安藤隆男 (2023) 自立活動の個別指導における特別支援学校(肢体不自由)教師の意思決定に関わる構造と関連要因ー身体の動きに関する指導に着目してー. 特殊教育学研究, 61(2), 67-76.
- 北尾倫彦・速水敏彦・中村知靖 (1988) 教授スキル評価の視点に関する検討. 日本教育工学雑誌, 13(3), 91-99.
- 児玉佳一 (2016) 授業における教師の知識と思考に関する研究動向: 1990年代から現在までに焦点を当てて. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 55, 357-366.
- 小山悦司 (1986) 力量の定義. 岸本幸次郎・久高善幸編. 教師の力量形成. ぎょうせい.
- 久我直人 (2007) 教師の専門性における「反省的実践家モデル」論に関する考察(1)ー教師の知識研究の知見による考察を中心にー. 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 22, 23-29.
- 小倉靖範・有井香織・大島茉莉・加来慎也・塩田順子・安藤隆男 (2019) 特別支援学校における協働性の構築を目指した授業研究の試み. 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 4, 17-23.
- 大羽沢子・井上雅彦 (2007) 特別支援学級担任の短期研修プログラムの開発と有効性の検討ー学習指導場面における教授行動と学習行動の変容ー. 特殊教育学研究, 45(2), 85-95.
- 坂本喜代子・末永三枝 (2023) 授業リフレクションによる教師の実践知ー特別支援教室でのアサーティブネス指導を通してー. 帝京大学教職センター年報, 10, 15-25.
- 笹原雄介・山元薫 (2019) 知的障害特別支援学校の授業づくりにおける実践的知識の分析ー段階ごとの授業づくり過程の比較検討を通してー. 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇), 51, 93-110.
- 高橋翔織・小倉靖範 (2022) 特別支援教育に関する実践的知識が通常学級の授業における教師の意思決定に与える影響. 障害者教育・福祉学研究, 18, 49-54.
- 高橋翔織・小倉靖範 (2024) 若手教師の専門性向上のための授業リフレクションによる指導改善効果の検討. 障害者教育・福祉学研究, 20, 79-87.
- 高見仁志 (2014) 音楽科における教師の力量形成. ミネルヴァ書房.
- 田中洋 (1983) 精神薄弱養護学校における教授行動と教師の特性との関係. 精神薄弱児研究, 304, 73-79.
- 特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議 (2022) 特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告. https://www.mext.go.jp/content/20220331-mxt_tokubetu01-000021707_1.pdf (最終閲覧日 2025.9.10)
- 内海友加利・平山彩乃・安藤隆男 (2018) 肢体不自由特別支援学校のティーム・ティーチングにおける教師の意思決定過程の分析と授業改善. 特殊教育学研究, 56(4), 231-240.
- 八木澤史子 (2021) 児童が情報端末を活用する授業における教師の授業力量に関する研究. 博士学位論文.
- 吉崎静夫 (1997) デザイナーとしての教師 アクターとしての教師. 金子書房.